

一九世紀末フランス史学を見る眼について

渡 辺 和 行

この小論は、一九世紀末のフランス歴史学を分析する視点について、筆者の考えを述べることを目的としている。それは、たんに筆者の研究の途上で必然的に生じた問題であるという個人的理由からのみならず、この分野におけるわが国の研究が皆無に近いという一般的理由からも、いかなる視角でこの問題を論ずるかを整理しておくことが有益であると思われるからである。

一九世紀末のフランス歴史学は、実証主義史学と呼ばれる。今日、実証主義史学は、「歴史のための歴史」(H・ベール)とか、「解釈学的歴史主義」(G・イツガース)とか、「科学的唯名論」(N・カンター、R・シュナイダー)とか、「過剰経験主義」(F・K・リンガー)と形容され、世評は芳しくない。<sup>(1)</sup> リュシアン・フェーヴルも、当時の歴史学は「一八七〇年の敗者の歴史」であり、「総合の放棄」と「勤勉ではあるが知的には怠惰な『事実』崇拜」と「外交史偏重」を特色としていたと酷評している。<sup>(2)</sup> このようにアナル学派が歴史学のエスタブリッシュメントとなるや、実証主義史学は否定的ニュアンスで論及されるのでしかないのである。それは一般に、作業仮説ないし理論的解釈を拒否した事実志向的な経験主義として説明されるのである。<sup>(3)</sup> 確かに実証主義史学は、政治史や外交史を中心とした「出来事」の編年史的な歴史叙述を特徴としている。今日、翻訳されているシャルル・セーニョボスの通史<sup>(4)</sup> を読んでも、ジュール・ミシュレの『フランス革命史』ほどの感興をもよおさないのは事実である。方法論上の相違を勘案しても、歴史が本来、「物語」であつたことに想いを到すなら、これは実証主義史学にとって不利な点ではある。さらにその通史のなかで、「史料がないのでその点についてはわからない……云々」というあまりに率直な一文にしばしば出あうとき、そこに「歴史家は文献とともに仕事をするとか、「文献なくして歴史はない」というセーニョボスの本領を見ると同時に、セーニョボスが歴史学は「推測科学」<sup>(6)</sup> であることを承知していただけに、知的誠実さというより知的怠惰を感じざるをえないのである。<sup>(7)</sup> このセーニョボスが、今日、実証主義史家の代表者とされるにいたつたのは、かれが

『歴史学入門 Introduction aux études historiques』（ラングロワと共著、一八九八年）や『社会科学に應用された歴史の方法 La méthode historique appliquée aux sciences sociales』（一九〇一年）といった、歴史学方法論の著作をものしたことによる。実証主義史学の守護聖人的な存在であったガブリエル・モノーが、歴史の方法についての著書を遺さなかつたため、セーニヨボスの著書が実証主義史学の方法論を開示した書物として、一般に受けとられたのであろう。このゆえに、セーニヨボスに批判が集中したのである。<sup>(8)</sup>

たしかにセーニヨボスの通史の方法を、知的禁欲の表われとして単純に讃えることはできない。しかし、われわれはフェーヴルやマルク・ブロックのセーニヨボス批判<sup>(9)</sup>に囚われ、セーニヨボスという一斑によつて、実証主義史学という全豹を卜するという誤りを犯してはいないであろうか。セーニヨボスは第二世代の実証主義史家であり、第一世代の実証主義史家たるフステル・ド・クラランジュ<sup>(10)</sup>やG・モノーとは、その方法をやや異にする歴史家であつたからである。ブロック、アンリ・ベール、フェルナン・ブローデルがフステル・ド・クラランジュを讃え、フェーヴルがモノーを「私の師」と呼んだことを忘れてはならない。<sup>(11)</sup>さらにわれわれは、セーニヨボスが曖昧で疑問の余地がある社会学概念をもつていたことを認めるのにやぶさかではないが、かれが「歴史学と社会学の間に、つながりを作ることに熱心な歴史家であつた」<sup>(12)</sup>ことも忘れてはならないであろう。この評価は、『歴史総合評論 Revue de synthèse historique』を創刊して、伝統的歴史学への批判を展開したアンリ・ベールその人の評価である。『革命的群衆』を著わしたジュールジュ・ルフェーヴルも「シャルル・セーニヨボスは、われわれの世代にとつて、近現代史に関する優れた師であつた」<sup>(13)</sup>と述懐している。さらに今日、貶価されることが多いセーニヨボスの方法論的著作を虚心に読むとき、なるほどそこに、歴史現象を個人心理に還元する「歴史的原子論」（H・ベール）とか、歴史思想を欠いた「文献学的歴史」（クローチエ）という欠点を見るが、<sup>(14)</sup>それでもわれわれは「通説」とは別の印象も抱懐せざるをえないのである。

ドイツ史学史研究の第一人者であるゲオルク・G・イツガースも、次のように述べている。「一八九八年に出版され、数世代にわたってフランスの学生の標準的な教科書となったシャルル・ラングロワとシャルル・セーニョボスの共著『歴史学入門』は、表面的に見れば、ドイツの模範に従属しているように見える。著者は、書かれた記録なくして歴史は存在しないということを強調しており、また、歴史家がこれらの記録とどのように取り組むべきかを詳しく指示していた。しかしながら、もつと正確に文言を読み、また、セーニョボスの『社会科学に應用された歴史の方法』をも利用すれば、著者たちが、ドイツの先輩たちに比べて、問題を設定し、仮説を形成するうえでの歴史家の積極的な役割をもつと明瞭に認識し、歴史の説明において一般化と社会的要素が果たす役割をもつと快く認めていたことが明らかになる。」<sup>(15)</sup>（傍点は筆者）筆者がかつて、『経済社会史年報 *Annales d'histoire économique et sociale*』の「鼻祖のポレミックな発言をも、歴史学の対象として扱うこと、すなわち、堅実な批判精神によってそれを位置づけることが今や必要となった」<sup>(16)</sup>と主張したのも、このような理由に基づくのである。つまるところ、実証主義史学にたいする態度として、今日のわれわれが亀鑑とすべきなのは、パルマードがセーニョボスの主著の一つへの序文のなかで述べたような態度ではなからうか。すなわち、セーニョボスの「概説史 *histoire-tableau*」をフェーヴルと同じ見地から批判しはするが、「実証主義史学 *histoire «positiviste»*」が「その時代には決定的であった変革から生じた」<sup>(17)</sup>と、「一九世紀最後の三分の一世紀における必要不可欠な進歩であった」ことを承認する態度である。

筆者は以上のような反省に立って、実証主義史学と対峙した。実証主義史学の実像ないし全体像を解きあかすことと、アナール学派が出現する背景を知ることが、重要な *problématique* として浮上する。そこで問題となるのは、いかなる視点から対象にアプローチするかということである。われわれは、実証主義史学の展開を、生成発展の時期と転形の時期の二つに区分することによって、この問題を解決することができる。この二つの時期区分は、ロマン主義

にたいする反立として登場した実証主義が、一九世紀末から反実証主義潮流の批判にさらされたという哲学的趨勢とも一致している。その二つの時期とは、第一に、実証主義史学がフランス歴史学にとつて、文字通りポジティブな役割を演じた時期と、第二に、実証主義史学が通俗化してダイナミズムを失い、新しい時代の挑戦に直面した時期である。第一期は、おおよそ一八六〇年代から一八九〇年頃の時期であり、第二期は、一八九〇年頃から一九二〇年代の時期と見なすことができるであろう。第一期には、歴史家の歴史観を内在的に理解する伝統的アプローチと知識社会的アプローチの併用が有効であり、第二期には、主として複眼的な伝統的アプローチが有効である。このような視点からする実証主義史学へのアプローチこそ、実証主義史学の「全体を見る眼」をわれわれに与えてくれるのである。<sup>(18)</sup>

いま少しく、これらのアプローチを説明しよう。第一期の基本的視角は、第三共和政の成立と学問の制度化である。<sup>(19)</sup>なぜなら実証主義史学は、共和政と歴史学との同盟、換言すれば、民主主義と科学との同盟として成立したからである。<sup>(19)</sup> ヴィクトール・デュリュイ（古代史家で文部大臣）、エルネスト・ラヴィス（近代史家で高等師範の校長）、アルフレッド・ランボー（ビザンチン史家・近現代史家で文部大臣）、ルイ・リアール（哲学教授で高等教育局長）、フェルディナン・ビュイツソン（教育学教授で初等教育局長）といった教育行政に携った学者と、教育改革を提言した歴史家たち（モノー、セーニヨボス、フェルディナン・ロート等）との間に強い紐帯が存在したのである。勿論、ヴィクトール・クーザンやフランソワ・ギゾーの例に見られるように、学者が教育行政に関与した先例はフランスには多い。しかしこの時期を他の時期から分かつものは、普仏戦争の敗北という衝撃をうけて、教育改革が国民的課題として認識され、朝野をあげて、その実現にとりくむことのコンセンサスが形成されていたことである。学問としての歴史学を志向する歴史学の革新も、学制改革の一環として位置づけられていたのである。だからこそ、史学的アプローチに加えて知識社会的アプローチを採用することが、不可欠となるのである。もつとも筆者の一連の研究が、

十分、これに成功しているとは言いがたい。歴史家と教育改革との関わりや、その改革のもつ政治的意味あいについては、これまでのところ、ほとんど触れえていないからである。今後の課題としたいが、一言、弁明を付けくわえると、これまでの筆者の関心が、何よりも実証主義史学の成立にあったことがその理由である。あくまでも史学史の関心が主であり、教育史的関心は従であった。

第二期は、制度化された実証主義史学が、自己の方法への批判に直面したときである。いわば最盛期の実証主義を人文科学の領野で代表したエルネスト・ルナンとイポリット・テーヌが、一八九〇年代前半という第二期の初めにいついで他界したことは、象徴的である。両者は、まさに「科学、進歩、実証的方法に注がれた期待を……一身に體現していた人たち<sup>(20)</sup>」であったからである。一八九〇年代に、歴史学の性格や方法についての書物が陸続と出版されたり、二〇世紀にはいつて、歴史家と社会学者との論争が繰り広げられた背景には、俗流化した実証主義への批判という状況が存在したのである。<sup>(21)</sup>したがって第二期においては、方法の問題を正面から論ずる必要があるのである。それには、歴史学方法論の正攻法で迫るのが一番であろう。ただし筆者は、伝統的な史学史のアプローチを操作化し、二つに細分して用いようと思う。この方法は、普仏戦争の衝撃が歴史学の革新を促進したという事実によって正当化されるのである。この方法は、いわば二つの眼からなりたっている。複眼的な視点から、この時期の歴史学の状況を、とりわけ、ガブリエル・モノーの歴史観を追体験的・追構成的に理解し、説明しようと思うからである。一つは、フランス国内における歴史研究の進展を見る縦の眼であり、他の一つは、フランス一国という視野を突破し、仏独両国の歴史学の発展と相互の影響関係を見る横の眼である。すなわち、通時的な系譜論的・発生論的な視点と共時的な比較論的・関係論的な視座である。この視座を獲得することによって、実証主義史学が成立する以前および以後のフランス史学を、ドイツ史学との連関において論評することが可能となり、さらに、実証主義史学が裾野を広げてゆく過

程で、いかなる問題に逢着したのかをも、問うことが可能となるのである。社会史パラダイムの通常科学化という歴史学の現在を前にして、実証主義史学を論ずる筆者の基本的観点は、以上のごとくである。

筆者は、このような一般的観点から、一九世紀後半のフランス史学を眺めてきた。旧稿<sup>(22)</sup>および前稿<sup>(23)</sup>において指摘したように、学問としての歴史学がフランスに成立したのは、一九世紀最後の四半世紀のことであった。モノーを中心とした実証主義史家が、歴史学の確立に尽力したのである。『史学雑誌』の創刊（一八七六年）に象徴されるように、モノーはフランス歴史学の組織者であった。そしてモノーの歴史学方法論が、けっして「過剰経験主義」とか「科学的唯名論」と貶価しえないものであることも、われわれは知ったのである。

ところが、史料批判や文献批判を方法的武器とする実証主義史学が、フランスの歴史学を制覇したそのときに、実証主義史学は二つの批判と一つの論争に直面したのである。二つの批判はフランス国内から放たれ、一つの論争はドイツから伝えられた。このような状況は、いうまでもなく、一八九〇年代から開始される「実証主義への反逆」というヨーロッパ大の学問的文派に位置づけうるものである。<sup>(24)</sup>したがって、これらの批判や論争は、歴史学の領野でのその表われということになるが、歴史学の領野では、他の学問領野と、ある位相差を伴っていたことを銘記しておこう。というのは、ドイツで批判された実証主義は、本来の意味での自然科学的な実証主義であり、フランスで批判された実証主義は、派生的な意味での史料実証主義であったからである。<sup>(25)</sup>すなわち、ドイツでは歴史主義の立場から、本来の意味での実証主義が批判されたのにたいして、フランスでは本来の意味での実証主義に近い立場から、派生的な意味での実証主義が批判されたのである。このような重大な相違を含みつつも、フランスにおいては、二つの批判と一つの論争というこれら三つの契機は、歴史の方法について再考することを、モノーに促したのである。

第一の批判は、エミール・デュルケームやフランソワ・シミアンによる社会学からの歴史学批判であり、第二の批

判は、アンリ・ベールによる歴史哲学からの歴史学批判であった。新興の社会科学と伝統的な人文科学からのこれらの批判は、今日では、社会史パラダイムへの転換を画するものとして位置づけられている。デュルケームやH・ベールが共通して批判の俎上にのせたものは、事実の穿鑿に自足し、事実の蒐集学と化した素朴実証主義ないし史料実証主義であった。批判の矢面に立たされたのは、モノーではなくて、セーニョボスである。<sup>(26)</sup>しかしモノーは、これらの隣接領域からの批判を真摯に受けとめ、歴史の方法や歴史学の性格を再考するにいたるのである。モノーが『歴史学の巨匠たち——ルナン、テーヌ、ミシュレ Les Maîtres de l'histoire: Renan, Taine, Michelet』(一八九四年)を論ずる必要性を感じたのもそのためであろう。とりわけモノーが、ミシュレ研究に打ちこんでいった事実は、たとえ高等師範時代からのミシュレへの鑽仰という個人的モチーフがあるにせよ、先述の学問状況との符合を類推させるに十分である。

フランス国内のこのような歴史学の状況に棹さしたのは、ドイツのランプレヒト論争である。ランプレヒト論争とは、カール・ランプレヒトが『ドイツ史』全五巻(一八九一—一九五年、最終的には全一二巻、一八九一—一九〇九年)を世に問うて、政治史優位のドイツ史学に異議申し立てをしたこと<sup>(27)</sup>によって生じた論争である。この論争は、「個性」対「発展」、「政治史」対「文化史」という歴史学内部の認識論的存在論的対立から、「理解」対「説明」、「文化科学(精神科学)」対「自然科学」、「個性記述的」対「法則定立的」という学問全般にわたる方法論争へと発展した大論争であった。<sup>(28)</sup>オットー・ヒンツェの好意的批判はあったものの、ランプレヒトの敗北に終わったこの論争は、三〇年ほど前に、ドロイゼンによって先鞭がつけられた実証主義批判の延長線上に位置づけることが可能である。ドロイゼンのバツクル批判<sup>(29)</sup>(一八六三年)によって始められた方法論争は、経済学の領域でも、シュモラーとメンガーの論争(一八八八年)を随伴しつつ、ランプレヒトと新ランケ派との論争へと継承されたのである。<sup>(30)</sup>この論争にフランスの歴史家

が、直接、介入することはなかったが、フランス側からの反応として、アンリ・ピレンヌの論文<sup>(31)</sup>や、『史学雑誌』・『社会学年報』の書評論文などをあげることができる。総じてフランス側の反応は、ランプレヒトに好意的であった。詳細は別稿に譲るとして、次のことを指摘しておきたい。

それはランプレヒト論争にたいする仏独両国の反応の相違のなかに、われわれは二〇世紀の仏独両国の歴史学の歩みの差異を読みとることができるということである。すなわち、ドロイゼンの実証主義批判<sup>(32)</sup>に端を発したドイツの法論争は、デイルタイの『解釈学の成立』（一九〇〇年）となって実を結び、ドイツ歴史主義は、「理解」によって哲学的に基礎づけられたのである。ドイツの歴史学は、「文化科学」と「自然科学」の峻別理論、方法二元論という解釈学理論の影響を被ったのである。<sup>(33)</sup> それにたいしてフランスの歴史学は、峻別ではなくて諸科学との融合、つまり統一科学とも呼ぶべき「人間科学」へと、学際化と総合化の道をたどったのである。<sup>(34)</sup>

アナール学派の第一世代となるリュシアン・フェーヴルやマルク・ブロックが学生時代を過ごし、歴史家になるための修業をしていたのは、このような時代であった。<sup>(35)</sup> モノーに歴史の方法の再考を促した三つの契機も、この時期に集中しているのである。一八九〇年代から二〇世紀初めの時代の重要性が、理解しうるであろう。そこにはスチュアート・ヒューズによって、「実証主義—反実証主義論争は、一八九〇年代から一九二〇年代にかけて、大陸ヨーロッパの大学を震撼した<sup>(36)</sup>」と要約される一般的状況があったのである。

ミシュレの弟子であり、フェーヴルの師であったモノーの晩年の歴史観を論ずる意義も、ここにあるのである。ドイツより約三〇年遅れて始まったフランスの実証主義批判に、フランス歴史学の組織者であり変革者であったモノーは、いかに回答したのであろうか。これを解明することが次稿の目的であり、その分析視角を明示することが本稿の目的であった。

- (1) William R. Keylor, *Academy and Community: The Foundation of the French Historical Profession* (Cambridge, 1975), pp. 8-10. もつともポール・ウェーヌ『歴史をどう書くか』(法政大学出版局、一九八二年)のモチーフを付度すると、様々に形容される実証主義史家の素朴な科学信仰は、アナール学派の一部に見られる計量経済史や人口動態史のコンピューターを利用した科学主義と、「マンタリテ」においては同根という印象を禁じえない。
- (2) Lucien Febvre, *Combats pour l'histoire* (Paris, 1953), p. vii.
- (3) これは実証主義自体が抱えていた否定的側面の顕在化である。というのは、実証主義は宗教的形而上学に反対し、観察可能な経験的事実の優位性を主張した点で、進歩性をもっていたが、「実証的 positif」という言葉に含意されるように、実証主義とは(現実)肯定主義でもあったからである。とりわけフランスでは、第三共和政のイデオロギーとして機能したことは、周知の事実である。マルクーゼも指摘するように、実証主義の哲学は、ヘーゲルの「否定の哲学」にたいする「肯定の哲学」であった。H・マルクーゼ『理性と革命』(梶田・中島・向來訳、岩波書店、一九六一年)三五九〜三六四、三七八〜三九四頁。
- (4) セーニョボス『フランス民主主義発展史』(福永英二・新関嶽雄訳、月曜書房、昭和二六年)。同『現代文明史』(大日本文明協会編輯局訳、明治四二年)。同『欧州現代政治史』(全三巻、山崎直胤・山崎直三訳、大日本文明協会、明治四三〜四四年)。なお筆者は未見であるが、ラヴィスの通史も翻訳されているようである。エルネスト・ラヴィツス『欧州政治史概説』(広瀬哲士訳、大正六年)。
- (5) Charles Langlois and Charles Seignobos, *Introduction to the Study of History* (New York, 1898), p. 17. 高橋巳寿衛訳『歴史学入門』(人文閣、昭和一七年)三頁。なお引用文は、邦訳どおりではない(以下、同様)。このラングロワとセーニョボスの公式は、のちにフェーヴルによって「歴史は文献で作られる。今だに罷り通っている、この有名な決まり文句」として、非難されるものである。Febvre, *op. cit.*, p. 4. 長谷川輝雄訳『歴史のための闘い』(創文社、一九七七年)五頁。
- (6) セーニョボスは「歴史とは推理の堆積により、欠けているところを補うものである」とか、「歴史学は、観察の科学ではなくて推測の科学である」と記している(Langlois and Seignobos, *op. cit.*, p. 261, p. 317. 邦訳二六三、三三〇頁)。G・モノーは、さらに謙虚に、歴史学を「貧弱で卑小な推測科学」とか、「不正確な諸科学のなかの最も不確かな科学」と形容した(Gabriel Monod, "Histoire," in *De la méthode dans les sciences*, Paris, 1909, p. 410.)。フェーヴルと親しかったアンリ・ピレンヌも、歴史は「推測科学」ないし「主観的科学」であると述べているが(ピレンヌ「歴史家は何をしようとしているのか」一九三二年、バーリン、ヒューズ、ピレンヌ、内山秀夫編訳『歴史における科学とは何か』三一書房、一九七八年、一七三頁)、このような見解は、一九世紀末から広く受けいられていたようである。ピレンヌ論文は小論とはいえ、かれの歴史の方法を余蘊なく示しており、得ると

- ころが大きい。
- (7) マルク・ブロックは『私は知らない』、『私は知ることができない』と言うことは、つねに不愉快である。精力的に必死に研究した後、はじめてそう言うべきである」と手厳しい。名ざしこそしていないが、この批判がセーニヨボスに向けられたものであることは自明である。Marc Bloch, *Apologie pour l'histoire ou métier d'historien* (Paris, 1964), p. 23. 讀井鉄男訳『歴史のための弁明』(岩波書店、一九五六年) 四一頁。
- (8) 邦語文献でセーニヨボス批判を紹介したものに、本池立『「アナール」への道』『思想』七〇二号(一九八二年)、井上幸治「アナール学派の成立基盤」『歴史評論』三五四号(一九七九年)、スチュアート・ヒューズ『ふさがれた道』生松・荒川訳(みすず書房、一九七〇年)。しかしF・A・ハイエクが、一九四〇年代に発表した科学論のなかで、ラングロワとセーニヨボスの『歴史学入門』の一節を好意的に引用したことは、批判されたにもかかわらず、『歴史学入門』の影響力が大きかったことを傍証していると言えそうである。F・A・ハイエク『科学による反革命』佐藤茂行訳(木鐸社、一九七九年) 三九、一一〇頁。
- (9) Febvre, "Ni histoire à thèse ni histoire-manuel," Do., "Pour la synthèse contre l'histoire-tableau," in *Combats pour l'histoire*, pp. 70-74, 80-98, Block, *op. cit.*, p. 109. 邦訳Ⅲ頁。
- (10) 周知のように、フュステル・ド・クラランジュは、アナール学派によって評価される歴史家の一人であるが、かれを実証主義史家として位置づけるのは、かれが他の実証主義史家と同じく科学信仰を共有していること、また今日ではきわめて当然のこととされる資料に基づく歴史叙述の方法を確立した一人であることによる。それは次のような発言に明らかである。フュステルは、一八八八年に「歴史は芸術ではなく、純然たる科学なのである」(cités dans J. Ehrard et G. Palmade, *L'histoire*, Paris, 1964, p. 324.) と断言したし、また「歴史家の特異な才能は、資料に含まれているすべてのものを取りだが、資料に含まれていないものは何ひとつとして付け加えないことにある。最良の歴史家とは、テキストのもつとも近くにおり、テキストをもつとも正確に解釈し、テキストよってのみ記述し思考する歴史家のことである」(cité dans G.-P. Palmade, "Préface," in Charles Seignobos, *Histoire sincère de la nation française*, Paris, 1982, © 1933, p. 2.) と述べていた。
- (11) 渡邊和行「フランス実証主義史学成立の背景」『香川法学』第五卷第四号(一九八六年) 六二頁。同「フランス実証主義史学の成立とガブリエル・モノー」『香川法学』第六卷第四号(一九八七年) 七六頁。
- (12) Henri Berr, *La synthèse en histoire*, nouvelle édition (Paris, 1953), © 1911, p. 114.
- (13) Georges Lefebvre, *La naissance de l'historiographie moderne* (Paris, 1971), p. 291.

- (14) H. Berr, *op. cit.*, p. 71. クロオチエ『歴史の理論と歴史』羽仁五郎訳(岩波文庫、一九七六年版)三七〜四六頁。
- (15) Georg G. Iggers, *New Directions in European Historiography* (Middletown, 1975), p. 48. 中村・末川・鈴木・谷口訳『ヨーロッパ歴史学の新潮流』(晃洋書房、一九八六年)六〇〜六一頁。なお人名と書名の表記については、翻訳どおりではないことを断っておきたい。セーニヨボスの通史が示すように、セーニヨボスは自己の理論を歴史叙述に適用しなかった。それは丁度、ドロイゼンが、歴史叙述のなかで自己の理論を応用しなかったのと同様である。
- (16) 渡邊和行「フランス実証主義史学成立の背景」前掲論文、五一頁。
- (17) Palmade, *op. cit.*, pp. 2-5. バラクラフの著書も、基本的には同じ見地から執筆されている。G・バラクラフ『歴史学の現在』松村・金七訳(岩波書店、一九八五年)第一章。
- (18) 筆者は、パラダイムの転換とパラダイムの制度化というパラダイム論に示唆をえて、このような視角をもつにいたったが、イッガースによれば、この視角からする歴史研究が緒にいたったのは最近のことのようである。筆者の基本的な問題意識とも重なるので、その箇所を紹介しておこう。「歴史研究を社会や制度との関連のなかで発展していく独自の学問として捉え、このような歴史研究の歴史を探究する試みは、最近にいたるまでごくまれであった。」「歴史学の歴史は、けっして学問の自律的な内的発展としては理解できないのであって、歴史が叙述された時代の社会的、政治的および制度的脈絡をこそ明らかにしなければならないということも、われわれは十分念頭においているのである。」(以上、Iggers, *op. cit.*, pp. 5-6. 邦訳、四頁。)それは、福井憲彦氏の「学問そのものを歴史的脈絡のなかに相対化し、科学的議論の諸構造の発生と、社会における権力支配構造との関係を問いつける」という視座とも重なるものであろう(福井憲彦『新しい歴史学』とは何か』日本エディタースクール出版部、一九八七年、三二六頁)。ともあれ、イッガースが述べるような視点からの実証主義史学研究が始まったのは、一九七〇年代の半ばのことである。それまでは、「実証主義史学の歴史理論についての本格的な研究は、いまだ存在しない」と言われる状態が続いていたのである。Jean Glénisson, "L'historiographie française contemporaine," in Comité français des sciences historiques, *La recherche historique en France de 1940 à 1965* (Paris, 1965), p. XII.
- (19) デュルケームも晩年に、「民主主義が科学を信頼しないなら、民主主義は自己の原理に忠実ではないであろう」と述べて、第三共和政の教育改革を回顧している。Boyer, Croiset, Durkheim et al., *La vie universitaire à Paris* (Paris, 1918), p. 17. 本書は、留學生のための大学案内であるが、執筆陣の顔ぶれにも窺われるように、その水準は高い。フランスの高等教育機関の沿革を知るのに最適である。

- (20) J.-M. Mayeur and M. Reberieux, *The Third Republic from its Origins to the Great War 1871-1914* (Cambridge, 1984), p. 121.
- (21) 歴史学方法論を論じたものに、Paul Lacombe, *L'histoire considérée comme science* (Paris, 1894). Langlois et Seignobos, *Introduction aux études historiques* (Paris, 1898). Henri Berr, *La synthèse des connaissances et l'histoire : essai sur l'avvenir de la philosophie* (Paris, 1898). A.-D. Xénopol, *Principes fondamentaux de l'histoire* (Paris, 1899). 歴史家と社会学者との論争については、*Revue internationale de sociologie*, 12<sup>e</sup> année No. 3 (mars 1904). *Bulletin de la société française de philosophie*, VI-VIII (1906-1908). *Revue de synthèse historique* (1900-1905). *Année sociologique*, I, II et V (1898, 1899, 1902). Charles Péguy, "De la situation faite à l'histoire et à la sociologie dans les temps modernes," (1906), in Péguy, *Œuvres en prose 1898-1908* (Paris, 1959). 歴史学と社会学との関係は、今日でも、問いなおされている問題である。Fernand Braudel, *Écrits sur l'histoire* (Paris, 1969), pp. 97-121. ピーター・バーク『社会学と歴史学』森岡敬一郎訳(慶応通信、一九八六年)。
- (22) 渡辺和行「歴史家の誕生——修行時代のガブリエル・モノー一八四〇—一八七〇——」『香川法学』第六卷第三号(一九八六年)。
- (23) 渡辺和行「フランス実証主義史学の成立とガブリエル・モノー」『香川法学』第六卷第四号(一九八七年)。
- (24) スチュアート・ヒューズ『意識と社会』生松敬三・荒川幾男訳(みすず書房、一九七〇年)第二章。「実証主義への反逆」とは、勿論、通俗化された「実証主義への反逆」のことであるが、制度化されたあらゆるディシプリンは、つねに、ディシプリンの俗化という危険を孕んでいるのである。そこに科学革命の不可避性も、またあるであろう。
- (25) 実証主義の二つの意味については、渡辺和行「フランス実証主義史学の成立とガブリエル・モノー」四一—四四頁。フランスにおいても、ベルグソンやジョルジュ・ソレル、それにペギーやモリス・パレスの存在が示すように、歴史学以外の分野における「実証主義への反逆」は、ドイツと同じ位相にあったことに注意されたい。ただしフランスでは、この潮流が後継者をもちえなかったことの意味は、きわめて重要であると思われる。
- (26) セーニョボスの名譽のために一言すれば、セーニョボスは、一九〇三年一二月には、デュルケイミアンやアンリ・ペールの批判を受けいられたことであろうが、社会学と歴史学との相補的關係を承認するまでになつてゐる。セーニョボスは、「歴史の諸事実が整序される枠組を社会学にこそ求めねばならない」と断言し、「社会の多様な発展を比較する方法を歴史学に与える」社会学は、歴史学にとって不可欠である」と述べるにいたつてゐるのである。Charles Seignobos, "Rapports de la sociologie avec l'histoire," *Revue internationale de sociologie*, 12<sup>e</sup> année No. 3 (mars 1904), 163-164. もつとも厳密に言つて、一八九八年の『歴史学入門』

のなかでも、セーニヨボスは両ディシプリンの「相互依存的」関係について註記していたが (Langlois and Seignobos, *op. cit.*, p. 320. 邦訳、三三四頁)、一九〇三年には、それを敷衍したのであった。

- (27) 邦語文献をあげておく。上原専祿『歴史学序説』(大明堂、一九五八年)。千代田謙『第十九世紀ドイツ史学史研究』(三省堂、一九六〇年)一五章。西山勤二「カール・ランプレヒト対新ランケ学派あるいは理論対歴史」『研究紀要』(橘女子大学)第七号、一九七九年。奥田隆男「リツカートとランプレヒト論争」『経済論叢』(京都大学)第一三六巻第四号、一九八五年。三宅正樹「社会学と歴史学との対話」『思想』七三二号、一九八五年。吉武夏男「ランプレヒト対マイネツケ史学論争」『史学研究』(広島大学)七七〜七九合併増大号、一九六〇年。

- (28) この対立をアウフヘーベンしようとしたのが、マックス・ヴェーバーであることは周知の事実であろう。かれの一連の科学方法論の意義も、そこにあるのである。なおF・H・テンブルック『マックス・ウェーバー方法論の生成』住谷一彦・山田正範訳(未来社、一九八五年)参照。

- (29) Johann G. Droysen, "Die Erhebung der Geschichte zum Rang einer Wissenschaft." *Historische Zeitschrift*, IX (1863), 1-22. なおこの論文は、Droysen, (Hrsg. Rudolf Hübnér), *Historik* (München, 1960) © 1937, S. 386-405. に、付録としておさめられている。

- (30) G・H・フォン・ウリクト『説明と理解』丸山・木岡訳(産業図書、一九八四年)第一章。丸山高司『人間科学の方法論争』(勁草書房、一九八五年)序論。S・ヒューズ『意識と社会』前掲、第六章。

- (31) Henri Pirenne, "Une polémique historique en Allemagne," *Revue historique*, LXIV (1897), 50-57.
- (32) ドロイゼンは、一八五〇年代から、実証主義への批判を記し始めており、一八五八年には、物理的方法の本質が説明にあるとするならば、歴史的方法の本質は理解であると主張していたのである。(Droysen, *Historik*, S. 330. 権俊雄訳『史学綱要』刀江書院、昭和一二年、四六頁)。歴史における理解の問題を、命題として定式化したのがドロイゼンであった。筆者のライトモチーフとの関連においても、ドロイゼンが一八六〇年代に、ベルリン大学で、「探究的理解」の方法を講義していたことは看過しえない重要性をもっているのである。なぜなら、ドイツ留学中に、モノーが摂取したドイツ史学とは、ランケの歴史学かドロイゼンの歴史学かという問題があるからである。

- (33) このような二元論的学問観の影響が大きかったことは、一九三四年ですら、ケルゼンが「純粹法学」の定義を始めるにあたって、「法律学は精神科学であって、自然科学ではない」と筆をおろしたところにも窺知しうるのであろう(H・ケルゼン『純粹法学』横

田喜三郎訳、岩波書店、昭和一〇年、昭和四八年版を利用、二七頁）。なおデイルタイについて一言すれば、かれは「説明」と「理解」の峻別ではなくて、「段階的連続」を主張している点に留意する必要がある。かれは「精神科学と自然科学とで、同一の基本的な論理的作業（帰納・分析・構成・比較）がおこなわれるのは自明である」ことを承認しているし、「どんな了解においても、普遍的な諸見解が、演繹と類似した手続きによって、……知識として協力している」と述べている（デイルタイ『解釈学の成立』久野昭訳、以文社、一九七三年、五二、五九頁）。この方向を押しすすめたのがポール・リクールであり、かれは説明と了解の「粗雑な二者択一」ではなくて、「説明と了解の間の弁証法的な絆」を提示している（ポール・リクール『解釈の革新』久米・清水・久重訳、白水社、一九七八年、一八、四三頁）。「理解」を重視するボルノウも、説明は理解という「根源的かつ基礎的能力……のなかに組みこまれ、かつこうした能力にもとづいてはじめて成立する」と記している（O・F・ボルノウ『理解するということ』小笠原・田代訳、以文社、一九八一年、一五八〜一五九頁）。このように今日の解釈学は、単純な二元論でも一元論でもない点に特色が見られる。この文脈において、解釈学の現代的再生をなしたとげた名著であり、現在、翻訳が進められているハンス・ゲオルク・ガダマー『真理と方法』豊田・麻生その他訳（全三巻の予定で、現在は第一巻のみ訳出されている。法政大学出版社、一九八六年）の早期完訳が望まれる。

(34) フランスでは、この潮流が依然として主流を占めている。それは、歴史を「社会的差異についての科学」と捉えるポール・ヴェーヌが、「リッケルトやヴェインデルバントをみならつてはならない」と、かれらの「二分法」を峻拒しているところにも窺うことができる。ポール・ヴェーヌ『差異の目録』大津真作訳（法政大学出版社、一九八三年）五八頁。

(35) 歴史学と社会学との方法論争のみならず、ほぼこの時期から始まる物理学のパラダイム転換も、フェーヴルやブロックに多大な影響を及ぼしたのである。岸田達也「戦間期ヨーロッパ歴史思想における『危機』の問題」（『紀要』名古屋大学教養部、A第三〇輯、一九八六年）は、「歴史学の危機」との関連で、このことに論及している。

(36) S・ヒューズ「歴史家と社会学者」一九六〇年、内山秀夫編訳、前掲書、一〇五頁。

（一九八七年四月脱稿）

付記 『香川法学』 第六卷第四号所収の拙論に誤訳がありました。六一頁の終わりから二行目、外交論↓公文書学。  
原語は *la diplomatique* でした。